教学辞典』東大出版会・昭和四八年に所収）。

(8) Joseph C. Trainor, 前掲書、二八四-二八五頁。

(9) 一〇月三日付け英文を筆者・大崎が和訳した。Joseph C. Trainor Papers（トレイナー文書）に所収。

(10) 文部科学省「教育基本法案について（説明資料）」文部科学省・平成一八年五月。

(11) 平成一八年一一月一二日・毎日新聞社説「教育基本法改正・一から論議をやり直す時だ」

(12) 杉原誠四郎「日本の宗教文化と戦後の宗教法制」（『宗教法』第二五号・宗教法学会・平成一八年一一月に所収）。

精神世界のゆくえ
宗教・近代・霊性
島薗　進 著
目次
第一部　グローバルな現象としての精神世界
第二部　新霊性運動の体験と生の形
第三部　精神世界と知の構造の変容
第四部　現代世界のなかの新霊性運動
現代の世界的な宗教状況、精神の潮流を理解する上で重要な、スピリチュアリティや精神世界（著者は新霊性運動と呼称）を鳥瞰し、霊性的な人々の考え方・生き方について、その意義や問題点を探る。
四六判 2,520円（税込）
私たちは今どこにいるのだろうか？

イスラームを学ぼう
実りある宗教間対話のために
塩尻　和子 著
目次
第1章 イスラームの基礎知識
第2章 聖典クルアーン
第3章 スンナ派とシーア派
第4章 イスラーム法
第5章 イスラームの人間観
第6章 イスラームの社会観
第7章 イスラームの死生観
第8章 アラベスクの世界
第9章 イスラームの女性観
（他全14章）
現代世界の深刻な諸問題がイスラーム圏にしわ寄せされ、イスラームの教え自体が誤解されようとしている。クルアーンとイスラーム社会を宗教学の立場から解説し、対話による平和的共存の道を探る。
四六判 1,785円（税込）
イスラームは恐い宗教か？

秋山書店
〒180-0022 東京都武蔵野市境5-17-14 TEL:0422-53-2283／FAX:0422-53-2335
E-mail:akiyama@akiyamashoten.com ホームページ http://www.akiyamashoten.com/

特集　宗教教育の地平

高等学校の宗教教育と『倫理』『現代社会』の教科書

――教科書執筆の立場から

星川啓慈（ほしかわ　けいじ）

はじめに

高等学校の教科書のなかで、宗教は世界史・日本史・現代社会などでも扱われているが、もっとも宗教にかかわる論述が多いのは、倫理の教科書である。本稿では、実際に数研出版株式会社の『高等学校　倫理』『高等学校　現代社会』を執筆した筆者の体験にもとづきながら、[1]主として倫理と現代社会の教科書と、高等学校における宗教教育との関連を論じたい。

高等学校の宗教教育の三本柱は、高校生を除けば、①高等学校教育の大枠を決定する文部科学省の「高等学校学習指導要領」および『高等学校学習指導要領解説』、②これらにもとづいて出版社から出版される教科書、③現場の教員、である。本稿では、①を参照しながら、②にかかわる事柄を中心に論述し、③について最後で触れることにする。

一　「高等学校学習指導要領」および『高等学校学習指導要領解説』にみられる高等学校教育の枠組み

平成一一年の「高等学校学習指導要領」の改訂

日本の高等学校（以下、高校）の教科書は、「高等学校学習指導要領」（以下、指導要領）および『高等学校学習

指導要領解説』（以下、『解説』）によって大枠を決められているので、すべての教科書はこれらに則って執筆されている。そこから大きく逸脱することは、教科書検定があるため、不可能である。いいかえれば、基本的なところで日本の教科書には共通点が極めて多い、ということである。その一方で、執筆者たちは、個性も盛り込みながら、与えられた大枠の中で高校生へのメッセージを教科書に託している。

筆者が執筆した倫理と現代社会の教科書は、平成一〇年度に改訂され、平成一一年三月に告示された指導要領にもとづいている。これは、平成一五年度から、年次進行によって実施されている。その改訂は、文部省初等中等教育局長の御手洗康氏（当時）によれば、次のようなものである。

今回の改訂は、完全学校週五日制の下、各学校が［ゆとり］の中で特色ある教育を展開し、生徒に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの［生きる力］の育成を図ることを基本的なねらいとして行ったものである。(2)

この方針は、『解説』や教科書にある宗教関連の論述でも反映されているが、それについては、順次ふれていく。

指導要領と『解説』における「宗教」の取扱い

倫理の指導要領の「青年期の課題と人間としての在り方生き方」の「イ」は「人間としての自覚」であり、その内容については、「人生における哲学、宗教、芸術のもつ意義などについて理解させ、人間の存在や価値にかかわる基本的な課題を探究させることを通して、人間としての在り方生き方について考えを深めさせる」とある。さらに、その内容の取扱いについては、「イについては、ギリシアの思想、キリスト教、仏教、儒教などの基本的な考え方を代表する先哲の思想、芸術家とその作品を、観点を明確にして取り上げるなど工夫すること」とある。

こうした指導要領の記述にたいする解説は、次のようなものである。

「人生における哲学、宗教、芸術のもつ意義など」については、まず、生徒一人一人のもつ生き方にかかわる課題が、多くの先哲によって真剣に探究されてきた課題に通じており、その課題解決のために哲学や宗教や芸術が誕生してきたことに気付かせ、人生にもつこれらの意義について理解させる。そこから、哲学や宗教や芸術が何を問い、どのような答えを見出してきたかを、生徒自身の課題と重ね合わせて考えさせ、これらを手掛かりにして思索を深めさせる。哲学や宗教や芸術を、単なる知識の集積として学ばせるのではなく、人間としての在り方生き方を考える材料として、「人間としての自覚」を深めさせる契機となるようにするのである（『解説』五〇頁、傍点引用者）。

ここには、御手洗氏が述べていたことが反映されているのがわかる。

『解説』の中で、キリスト教と仏教については、次のように書かれている。

「キリスト教」では、イエスの言行などを適宜取り上げて、人間をどのようにとらえ、どのように生きることを指し示しているかを理解させる。この観点から、神について考えたり、パウロの原罪の思想に見られるキリスト教の人間観について、自己の課題と重ね合わせて考えさせることもできる。そこから、神の愛や隣人愛について自己の課題と結びつけて考えさせ、人間としてのよりよい生き方について思索を深めさせる（『解説』五二頁）。

「仏教」では、仏陀の言行を適宜取り上げ、仏教が人間をどのようにとらえているか、どう生きることを目指しているかについて、自己の課題と重ね合わせて考えさせる。例えば、縁起や業の思想を取り上げて人生における不安や苦がいかにして生まれるか、その苦はいかにして克服しうるかという課題や、生命あるものすべてに対する慈悲の教えについて、自己の課題と重ね合わせて考えさせる。これによって、生命の深遠さや人間としてどう生きればよいかについて思索を深めさせる（『解説』五二頁）。

この『解説』の部分で言及されているのは、ギリシアの思想・キリスト教・仏教・儒教だが、イスラームや老荘思想なども適宜取り上げてよい旨が述べられている